

令和3年度 学校評価 指導の重点についての教職員グループ別検証結果

(1)自らの命を守り抜く安全・防災・健康教育	成果と課題	改善策
① 感染症、食、アレルギー、飲酒喫煙薬物乱用防止をはじめ、情報進展に伴う事件・事故、防災、環境保全、国民保護等、健康・安全に係る情報を的確に判断し、主体的に行動する実践力を育成する。 特に、感染症の感染及び拡大のリスクを低減する環境づくりと指導に家庭と協力して努める。 「感染源を絶つ」毎朝の検温、健康観察 「感染経路を絶つ」手洗い徹底、マスク着用、近距離・大声での会話禁止、消毒・清掃 「抵抗力を高める」十分な睡眠、適度な運動及びバランスの取れた食事に係る指導 「三密を避ける」適切な換気 ② 時間厳守や体幹保持など「きびきびした生活」、換気、環境美化整備など「すがすがしい学舎」、挨拶など「さわやかな仲間」をはじめとして、安全安心で規律ある教育環境を確立する。 ③ 安全点検の徹底や体育授業等におけるきめ細かい生徒観察により事故の未然防止を図るとともに、定期的な緊急連絡体制の確認により、事故に即時即応する。 ④ 体育・スポーツ活動の楽しさや喜びを味わわせることにより、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する。 ⑤ 家庭や地域、関係機関と連携した防災防犯体制を確立するとともに、危険箇所の把握・改善や予告など避難訓練、自転車点検・自転車保険への加入等を通して安全に対する意識の高揚を図る。	①〇毎日の検温の徹底や、教室の換気など、十分に配慮し実践することができた。また、マスクの着用や手洗いなども、生徒主体で呼びかけることができ、学校全体として、意識して取り組むことができた。 〇感染症対策をとりながら、安全に給食指導を行うことができた。 また、アレルギー対応も複数で確認し、危機意識を持って取り組むことができた。 ●残食・残乳を減らせるような取り組みをもっと積極的にしていく必要がある。 ②〇チャイムと同時に、あいさつに始まりあいさつで終わる清掃指導ができた。教職員も一緒になって清掃活動に取り組むことができた。 ●新型コロナウイルスをはじめ様々な感染症対策について考慮し、トイレ掃除などの指導プランを立てる必要がある。 ③〇毎月欠かさず、校内の安全点検に取り組み、安全な環境を保つことができた。今年度から、各場所の担当者が自らがデータの入力をする形式をとった。緊急性を要さない内容については担当者で修繕してもらうように促した。 ④〇園科講演会・喫煙防止教室・性教育・薬物乱用防止教室・心臓蘇生講習会と計画的にすべて実施できた。 ⑤〇避難訓練を年間3回実施。(抜き打ち避難訓練を含む) 〇消防署・警備会社など関係機関との通報訓練を、避難訓練と同時に実施。 〇防災マニュアルの見直し。 ●避難経路を把握していない生徒が見られた。 ●避難訓練について、生徒による自己評価が、平均3.8(5段階)	①栄養教諭を招き、食育の授業をしてもらうなど、食に対する意識を高く持てるような機会を持つ。 ②子どもたちの経験値が変化中、時代の変化に応じて柔軟に対応していく。 清掃用具を充実させるための予算を確保する。 ⑤・避難経路の徹底を図るため、消防署員に來校を依頼するなど、関係機関との連携を強める。 ・避難訓練の生徒の自己評価をより高める。
(2)誇りを感じる学校・学級集団	成果と課題	改善策
① 学校生活の課題について、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、話し合い、合意形成、意思決定して改善することを通し、課題解決力や人間関係形成・社会参画する力を育てる。 ② 生徒会・教科係が生活・学習の諸課題について協力・協働して改善する活動を通して、学校内外の生活・学習マネジメント能力を育てる。 ③ 学校行事の選択と集中を通して、集団への所属感・連帯感を高めたり、高い目標をもち、自己を生かし、協力して課題解決したりする主体的、実践的な態度を育てる。 ④ ノー部活デー(木曜日と土日いずれか)による心身ともゆとりのある中で、効率的、効果的に部活動を行い、自発的・自主的に心身を鍛える生徒を育成する。	①●コロナ禍の中で、多くの制限がある中、思い通りの活動ができなかった。〇その中でも、工夫をして最善に取り組めたと評価する。 ②〇学級役員や教科係を通じて、呼びかけ、連絡などを行い、生徒自ら動いていた。 ③〇新たな姿であると前向きにとらえ、個々の行事に積極的にとりくもうとする姿が多く見られた。 ●コロナ禍において、様々な学校行事が中止や縮小、変更を求められる中、従来通りの行事をイメージする生徒の中からは、不満や達成感を得られていないなどの声があったことも課題として残す。 ④〇年度当初に職員会議で部活動運営について確認し、いきいき運動部活動に基づき、ノー部活デーを実施しながら活動することができた。その他、協議が必要場合には職員会議等で確認を取り、共通理解を図り活動することができた。	①活動計画を立てながら、効果的な活動ができるようにする。 ②学校生活をより充実したものにする取り組みを生徒会が中心となって考え活動する。 ③従来より行事の精選などが求められる学校において、コロナ禍での学校の姿が新たな学校の姿であると捉え、生徒が主体的にとりくみ、達成感を味わえるよう、各行事の持ち方をより一層工夫していく。 ④週2日のノー部活デーの設定だけでなく、部活動の在り方については今後さらに検討していく必要がある。また、短い時間の中でも効率的、効果的な活動になるように生徒自身が更に主体的に考え、行動できるよう支援をしていく。
(3)存在感や成就感を大切にした生徒指導	成果と課題	改善策
① 生徒が存在感を実感する中で自己指導力やコミュニケーション力を高めるよう、学習指導と関連付けながら命と人権を根幹に据えた開発的生徒指導を進める。 ② 学年担任制による多様な相談体制、ICTによる迅速な調査、スクールカウンセラーとの連携など、ガイダンスとカウンセリングの双方から、問題行動、不登校等の未然防止、早期発見・対応する。 ③ 学校基本方針や生徒会「No More!いじめ宣言」により、いじめの定義や実態を啓発し、家庭・地域・関係機関と連携したいじめ対応を進める。いじめアンケート、生活ノート等は、複数の目で点検をし、小さな変化を見逃さず、いじめを積極的に認知し、早期解決を図る。 ④ 生徒指導方針、いじめ防止基本方針を発信し、地域と一体となった生徒指導を進めるとともに、警察、福祉、医療等の関係機関と連携しケース会議等による組織的・計画的な個別支援を行う。 ⑤ 情報技術の仕組み、個人情報、肖像権や著作権の権利、ネット上のトラブル等を正しく理解させるとともに、使用時間や使用目的等の利用実態を的確に把握し、「情報機器取り扱い三箇条」等を見直して活用し、デジタルリテラシー教育を進める。また、相談機関について生徒・保護者に周知する。	①〇〇対話を基本とし、生徒の内面理解を進めるための生徒指導や、行事を中心に生徒自身が存在感を感じることでできる取り組みを行うことができた。学習指導と関連づけながら、言葉使いや命(人権)に対しての指導を行うことができた。11月に起きた愛知県の校内での殺人事件を契機とし、命の大切さについても考えることができた。 ●さまざまな取り組みを行ったが、新型コロナウイルス感染防止の観点で様々な教育活動が制限される、仲間作り活動や、集団の中での自分を評価される機会が少なかった。 ②〇学期毎に行っている教育相談では担任以外の教師にも相談ができるなど、少しずつではあるが学年担任制が進んでいる。また、担任教師が中心になることが多いが、不登校生などの対応も担任以外の教師が関われるようにも取り組めた。ICTによるアンケートも、授業内や学年単位で実施できるようになった。SCとの連携では、授業内でガイダンスを行うなど、ものも時に相談しやすい環境を構築することができた。また、教師向けの講演会資料も作成してもらうなど問題行動、不登校に対しての未然防止にも取り組めた。 1、2学期の終業式に継続的、計画的に警察の方に来校して頂き、SNSについての講話してもらったのがとても効果的であった。 ●学年担任制に関しては、まだまだ改善の余地があると考えている。 ③〇「No More!いじめ宣言」に関してはバッジや教室掲示、4月の学活で生徒に共有することができ、学校便り、学年通信を通して家庭にも周知することができた。また、年3回行ういじめアンケートのなかで出てきたことに関しては即時対応し、早期解決に向けた取り組みを進めることができた。 日頃の生徒の言動を観察し、適切な指導につなげることや、日々の生徒とのノートのやりとりなどの情報から、生徒情報の共有を図り、教師間・保護者と同一歩調での指導に努めることができた。 ④〇いじめの基本方針を基に、全職員による共通理解を深め、いじめの積極認知と早期発見・早期対応に努めることができた。また、ケース会議を中心に子どもへの関わりについての事例研修を深め、組織力向上につなげることができた。さらには、医療につなぐ際にも日頃の生徒の様子をいかに伝えることができた。 また、SCとも連携し、情報を共有することで指導に活かすこともできた。 ⑤〇講師を招聘しての情報モラル講演会を開催するなど、情報機器の使用についての注意喚起を行うことができた。また、日頃からSNSの危険性についての指導を継続し、事業については保護者と連携し、対応することができた。 ●2018年に改訂した情報機器取り扱い3ヶ条の見直しを行う必要がある。	①新型コロナウイルス感染防止対策の観点で活動は制限されるが、コロナ禍であっても創意、工夫をし、可能な範囲での教育活動を行う必要がある。また、また、一方的な授業展開にならないよう、各教師が工夫し、コミュニケーション能力を高められるような、充実した授業展開を構築する。 ②不登校生徒等への対応については、ケース会議を中心に、支援体制を協議し、組織で対応することを基本としていく。必要に応じて、今後各機関と連携を密にする。また、ケース会議を持っていない生徒であっても、ケース会議を事業研修としてとらえ、さまざまな生徒に当てはめて考えることができるようになればと考えている。また、QUを年間2回実施から3回実施にすることで、表面的なことだけでなく、内面的なことまで理解した上で接することができる。また、Q-Uの研修なども行えば個人の支援方法、また、学級経営にも生かせるものと考えられる。 ③指導が教師によって偏りが出ることがないように、生徒指導委員会での確認事項を、学年会議や打ち合わせを活用し、全職員での共通理解を図る。また、いじめアンケートも複数の目で確認し、漏れ落ちのないように行う。 ④日頃の生徒との信頼関係の構築が大切であることから、普段の生活でのやりとりを大切に。また、年度当初にいじめの定義について、No More!いじめ宣言を活用し、職員・生徒で共通理解を行い、他者理解を進めるよう、指導する。 ⑤スマートフォン等の取り扱いについて、指導方針を明確にするとともに、生徒への講演会だけでなく、教師、保護者が最新の知識を得るための研修を実施する必要がある。また、情報機器の取り扱いについても生徒会活動と連動し、全員が共通して守れるルールを作っていく活動が今後必要である
(4)豊かな人間性・社会性を育む道徳教育、人権教育	成果と課題	改善策
① 他者や自己との対話による「特別の教科 道徳」を要とし、教育活動全体で、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。(中心発問の精査・評価を含めたローテーション授業の実施 保護者・地域への公開) ② 人間尊重の精神や生命に対する畏敬の念を具体的な生活の中に生かせるよう、全教育活動を通じて命と人権の大切さを教え、共に生きる心を育む。 ③ 地域に根ざした伝統芸能や多様な芸術を鑑賞したり、地域貢献活動に参加したりすることにより、ふるさと「丹波篠山」を愛する心を培い、我が国や外国の文化・伝統を理解し、尊重し合う生徒の育成を図る。	①〇校内である程度の統一した評価規程を示すことができた。ローテーション授業を行うことで、学校全体の道徳の授業の充実を図ることができた。 〇研究授業を実施し、教員の授業力向上につながった。 ●さらなる授業力の向上のために、道徳研修や研究授業の実施が必要。 ●本市における道徳教育に係る重点教材が未確認※作成中 〇本年度の体験型人権学習活動は、「夏休み人権学習ツアー」「人権啓発動画の作成」「SNSマナー講座」を行い、多くの生徒からそれぞれに参加申し込みがあった。ツアー担当者以外の教員の参加や「人権通信」でその活動の様子を全校生徒並びに教職員に伝え、人権教育の啓発につなげた。 ●コロナ禍での人数制限があり、体験型人権学習活動に希望しながら参加できなかった生徒も多かった。 ②〇全校集会で、命の大切さについて考える機会を持った。 ③〇昨年年度から続くコロナ禍により地域との交流が難しい中、地域のためにできることを考えた結果、校区内の火災で被害に遭われた方々への募金活動を行い、募金は丹波篠山市長に渡した。今後どのような状況になるかわからないが、できる範囲で活動できたと考える。 ③〇わくわくオーケストラでは、オーケストラの演奏を鑑賞し、クラシックの魅力を知った。また、上の方落語学校寄席では、「落語」という伝統芸能に触れることで想像力や感性を育んだ。さらに、道徳などの各教科のなかで、外国の文化や伝統について知識を深めた。	①学年ごとの年間計画を立てるときに、家庭訪問や懇談の時期は負担が授業者になるように計画することで、負担軽減につながる。また、震災などの道徳も担任がした方がよいのであるが、計画的に進めた方がよい。 ③④年間の見直しを持った。人権学習が必要と考えられる。また、人権担当者と協力して計画を立てていく必要がある。 ②年間計画の中で、人権教育担当者以外の教職員も講師として割り当てすることで、全教職員で足並みを揃えて人権教育を進めることができる。 ③コロナ禍の中でも継続して地域に貢献できる活動があれば、可能な範囲で参加できることが考えられる。 ③今後も継続して各教科の中で、外国の文化や伝統について取り上げる。 ③他の行事においても、子どもにも大人にも負担になりすぎないように配慮しながら取り組むことも考えていく。

(5) 将来や社会の糸口をつかむキャリア教育	成果と課題	改善策
① 職業構造の変化や新産業の創出、SDGs等も踏まえつつ、学ぶことと将来や社会とのつながりの中で自己の生き方を考え、社会的・職業的自立に向けた資質・能力や社会参画する意欲・態度を育む。 ② 生徒が能動的に生き方を考え、自らの意思と責任で自らのよさを生かす進路を選択できるよう、キャリア・パスポートを有効に活用し、キャリア形成に資する個に応じた組織的・計画的な指導を行う。 ③ ライフプランを含めたキャリア教育を通じて、主体的に生涯の生活を設計し、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）や、社会における自分の役割、自分らしい生き方について考えさせる。 ④ 体験活動のねらいを明確にし、事前事後指導を充実することを通して、地域の人々とながりを深め、勤労・奉仕等を尊ぶ心や、社会の一員としての自覚、社会参画への意欲、態度を養う。	① 〇外部から講師を招聘するなど多角的に考える機会を提供することができた。また、日々の授業の題材を取り上げることで、社会構造の変化についても考えさせることができた。 ● 今後はさらに各教科とリンクさせながら、年間を見通した計画を立て、各教科でもさらに工夫することが必要である。 ② 〇進路学習やトライやる・ウィークに向けた取り組みを通して、社会を知りながら、自らの考えを深める活動を取り入れることができた。 ● キャリアパスポートの活用については今後、さらに工夫や研鑽を積み必要がある。 ③ 〇自分自身を分析する活動を通して、自分を知り、社会での自分の役割を考える機会を持つことができた。また、職業調べを通じて、社会の様々な仕事について考えを深めることができた。 ④ 〇コロナ禍なので短期間ではあるが、企業訪問を通して職場体験や地域の方との触れ合いができた。また、受け入れてくださる企業があった。 ● プレゼンテーションを作成しそのスキルを高めることができたが、地域の方に来校していただくことはできなかった。	① 講演会を実施するなど、子どもたちが社会から学ぶ機会を提供する。 ② キャリアパスポートの使用方法については今後さらに検討が必要である。 ③ 教科指導とキャリア教育を結びつけた活動を計画することが必要。 ④ 計画的にキャリア教育を各学年で実施する。
(6) 基礎力・思考力・実践力を育む学習指導・授業改善	成果と課題	改善策
① 授業スタンダード（予習・目標理解・個人思考・集団思考・振り返り）に基づき、各教科等の見方・考え方を創発し、個と集団を思考が行き来する「主知的・対話的で深い学び」を進めるとともに、生徒が自らの学習を振り返り次の学習に向かうことができるよう指導と評価の一体化を図る。 ② GIGAスクールによるICT環境等を用いて、知識・技能の定着を図る「個別最適な学び」、仲間を考えを聴き自己の考えを深める「協働的な学び」、自己の学びを改善し、推進し続ける「主体的な態度」における学びの質を高める取組を推進する。 ③ 知識・技能が他教科等や生活で活用できるよう、見通しのある予習、振り返りのある復習を含む家庭学習に係るガイダンスや課題の個別化、放課後学習の充実を図る。 ④ 新学習システムを活用した少人数指導や補充的な学習、発展的な学習など、系統性を重視したつまずきの解消を図り、個に応じ個が生きる個別最適な学びの授業改善を進める。 ⑤ 特別支援教育を中核に据え、教育支援計画における合理的配慮と一貫性のある支援、及びユニバーサルデザインについて、全教職員の共通理解のもと組織的にPDCAサイクルを推進し、豊かな人間関係づくりとともに伸びる力を育成する。 ⑥ 授業時数を確保し、言語能力（英語によるコミュニケーション能力を含む）、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応する資質・能力を教科横断的な視点で育成する。 ⑦ 読書への興味を深めるとともに、創意工夫して読解力向上の取組を推進する。	① 〇「確中スタンダード」に基づいた授業を各教科担当が意識して行うことができた。その結果、授業の流れに見通しをもって取り組むことができる生徒が増え、個人と集団の対話的交流による学びが深まった。また、ユニバーサルデザインの視点から、視覚的な支援等も取り入れ、分かりやすい授業を実施することができた。 ② 〇ICT環境がしだいに整い、1人1台タブレットを活用した調べ学習が各教科で日常的に実施できており、ICTを活用した学習に対するモチベーションも向上してきた。 ② ● タブレットの使い方のについては、指導者や生徒の中で共通理解が充分できていない面も見られた。校内の学年間だけでなく小学校とも使用ルールの差違があった。 ③ 〇教科によっては、予習テストを取り入れることでスムーズに授業が進められるという成果が見られた。 ③ ● 自由課題学習のシステムを提示して家庭学習の習慣化を促している学年や教科もあるが、生徒全体の意識向上には結びついていない状況にある。結果として家庭学習の時間が少ない。放課後学習の対応として「がんばりタイム」を設定した結果、成果を上げている生徒もいるが、一方で参加を継続できなかった生徒もいるのが現状である。 ④ 〇少人数指導を行うことで、質問しやすい雰囲気を作り、個別最適な学びを実現することができた。 ● 話しやすい雰囲気を作ることは大切であるが、授業規律を守らせることを徹底させる必要がある。 ⑤ 〇篠友の担任・交流担任・教科担任が連携をとりながら、個に応じた対応ができた。 ● 特性を含め、生徒同士の理解を深める必要がある。 ● 通常の学級における「個別の指導計画」において、「誰が」その指導支援を実行するのか、明記されていないケースが多かった。 ○ 学校のUD化（特に「人的環境」）の研修ができた。 ● 授業のUD化について、新学習指導要領で提示された教科の特性と生徒の特性に応じた支援方法についての研修を進める必要がある。 ⑥ 〇各教科クロームブックを使い、積極的に情報活用能力の向上に努めた。また、英語科や道徳科、国語科などを中心に対話的な授業を展開し、言語能力の向上を図った。3年生の総合的な学習の時間では問題解決能力育成のため探求学習に取り組んだ。 ● 問題解決能力等の学習を各教科の中で取り組めていても、なかなか教科横断的な視点にまではいていない。 ⑦ 〇図書館だりの発行や学年文庫の設置、文化委員会のイベントなどにより、朝読書の時間がなくなって以降も、1・2年生の不読率の低下をおさえることができた。 ⑦ ● 蔵書を活用した授業の実践はほとんどできず、読解力向上への取組の推進はわずかだった。	② タブレットについては、校内での運用方法や、自主学習を促進するための適正な取り扱い方について検討を進める。 タブレットの持ち帰り等による様々なリスクについて十分に検討し、タブレットのお試し持ち帰り期間を実施するなどして、段階的にリスクチェックを繰り返しながら保護者にも理解を促していく。また、教職員を対象としたタブレット活用に関する研修会を企画する。 ③ 定期的に各教科毎の家庭学習の方法を指示し、取り組みさせる。評価の仕方や進路学習と繋ぐ説明も必要である。家庭の協力を求める働きかけも工夫していく。また、放課後学習に関しては、3年生を対象とした「がんばりタイム」は勤務時間外対応となる。したがって地域の人材を活用した運営が引き続き適切である。これら、家庭学習や自主学習の効果的な促し方について、校内を始めとする良い事例をモデルにした研修が必要である。 ④ 年度初めに授業のルールを生徒と一緒に確認し、規律を守ることで学力向上につながるということを意識させる。 ⑤ ・学年集会、各学級、個別に働きかけ相互理解を深める ・通常の学級の「個別の指導計画」は「誰が」「何を」の明記を徹底する。（「作成する」から「活用する」へ） ・授業のUD化の研修を行う。（各教科の実践の共有化を図る） ⑥ 年度初めに教科横断型の授業を取り入れ、年間計画を立てていくように啓発していく。 ⑦ 学習指導要領総則第3.1(7)に基づき、担当者の働きかけと全教員の利活用の実践が合致するよう、授業に活用できる蔵書を教科担当者に周知できる機会を設ける。生徒に対して、個人の読書に留まらずに、ビブリオバトルやブックトークなどで周りと本を通して交流する機会がもてるように声かけする。
(7) 支え愛に満ちた活気あるコミュニティ・スクール	成果と課題	改善策
① ホームページ、学校だより、オープンスクール等により、めざすべき子ども像や教育活動の目標や内容を具体的に説明し、家庭・地域の参画を促進する社会に開かれた教育課程を進める。 ② 生徒会と学校地域運営協議会が協議する「四つの力委員会」により、社会や将来の糸口となる、夢・やりがい・やすらぎ（安全安心）を体感する教育を進める。 ③ 学校地域運営協議会の協力のもと、教育課程の評価改善や、人的物的支援などについて、ICTを活用した社会との連携も行いながら、カリキュラムマネジメントを効果的に進める。 ④ 小・中・高等学校の連携を密にし、児童生徒・教職員・地域の交流を通して、地域の学校としての学びと育ちの連続性を確立する。	① 〇毎日のホームページ更新や毎月の学校便りの発行など、生徒にかかる学校の情報を、適宜発信することができた。 ② 〇コロナ禍で、オンラインにより生徒と運営協議会の方との学校生活についての情報交換や、ルール（きまり）について対面でじっくりと話し合うことができ、主体的に課題に取り組む解決する体験ができた。 ③ 〇外部から講師（BEET、田舎の窓、高木正勝氏、ニクローレケ氏）を招き、キャリア教育の観点からも将来に向けて有意義な講演を実施できた。 ④ 〇小中連携により、ユニバーサルデザインの研修を行い、議員を深めた。また生徒指導、特別支援の観点からも適切な情報交換、共有ができた。 ④ 〇入学者説明会をオンラインで行い、コロナ禍でも工夫して実施できた。部活動体験は割愛した。	① ～③ 新型コロナウイルス感染症対策のため、四つの力委員会の開催について、時間と場の設定が困難であるが、テレビ会議等を活用して円滑に進めい。企業等の外部人材を授業で一層活用していく。
(8) 困ごころで子どもとともに学ぶ教職員組織	成果と課題	改善策
① 教育は「今日行く」を行動の基本におき、生徒・保護者・地域住民のつづやきに敏感に気づき、複数で即時即日対話し、課題と改善の方向性を共有する。（素早く丁寧に、そして笑顔で） ② 兵庫県資質向上指標により育成目標を重点化し、学年担任制、一人一研究授業を通じ、保護者や地域の期待に応えられる豊かな人間性、専門性と実践的指導力の向上をめざし、研究と修業に努める。 ③ 法令、社会通念に基づき、非違行為は教職員全体の信用・信頼を損なうことを深く理解し、教職員としての誇りと責任をもって自己の行動を律するとともに、情報化、グローバル化など社会の変化に対応した教育観を培う。（職員申し合わせ事項の実行） ④ 校務の効率的・効果的な実施、会議の効率化（会議資料の事前配布）、ノー部活デー（木曜日と土日いずれか）や定時退勤日の徹底、記録簿によるタイムマネジメント、計画的な休取得などワークライフバランスの保持と勤務時間の適正化を進める。1人1台タブレットを利用した校務・業務の効率化・情報化を進める。	① 〇コロナ禍でオンラインを活用するなど、工夫をしながら保護者、地域とのつながりをもって授業、学校行事を実施した。生徒指導についても、素早く丁寧に、そして笑顔でをモットーに取り組めた。 ● いじめ対応など、生徒指導に係る対応での情報共有やチェック体制を再度確認する。 ② 〇ユニバーサルデザイン研修、道徳研修、生徒指導や特別支援のOJTなど資質向上に向けて取り組めた。 ● 感染症まん延のため、通常の学校教育活動が困難となり、その対応のため研修を計画的に実施することが難しかった。 ③ 職員会議、朝の打合せなどで随時確認し、教育公務員として適切な対応、行動を心がけるよう意識できた。 ④ 〇ノー部活デーの実施、職員会議の効率的な実施のための工夫をそれぞれ実施できた。 ○ 外部の講師を複数回招き、教職員のICT端末の活用能力の向上に取り組めた。生徒へのアンケート実施などへも一人一台端末を活用できた。 ● 多忙化の解消に向けてさらに業務改善を進める。	① 重要文書のダブルチェックや計画的な取り組みについて、再度確認し、教育活動を丁寧にすすめる。 ② 授業研究を計画的に実施し、資質向上に資する。 ③ 非違行為等をなくし、信頼される学校づくりのための個々の意識を高める。 ④ 部活動の朝練習のスリム化 ④ 学校行事など（体育祭・文化祭）の開催方法の工夫 ④ 教育関連文書などの精選 ④ 業務を計画的に進め、タイムマネジメントの徹底